

# イタリア・ルネサンスの遠因と サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院

倉 田 稔

## 目次

はじめに ルネサンス 12世紀ルネサンス エメラルド・タブレット イタリアのルネサンス文学 東西教会の合同の試み サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院 フィレンツェ メディチ家 コジモ・ディ・メディチ、いわゆる老コジモ ルネサンス学問の開始 『ヘルメス文書』 まとめ

## はじめに

フィレンツェで花開いたルネサンスの遠因として2つある。1つは、12世紀ルネサンスであり、他の1つは、失敗に終わったが、東西教会の統一の試みである。

## ルネサンス

14世紀初から16世紀末までが有名なルネサンスで、文芸が発展した。<sup>(1)</sup> フィレンツェ、ヴェネチア、ミラノが、2世紀の間に文化都市になった。フィレンツェでメディチ家が支配し、ルネサンスが起きた。学者フィチーノ、ジョットの絵、アルノルフォ<sup>(2)</sup>の建築、ダンテの詩、ペトラルカの博識、ボッカチオの小説、ポッティチェリと三大芸術家が有名である。ただしジョットはルネサンス人ではない。

コンスタンチノーブルがトルコ軍に落とされ、ビザンチンから逃げた学者

がルネサンスの種を蒔いた。教皇もルネサンス芸術家を保護した。

写実主義も、中世末期とルネサンスとは違う。中世末期にも微細な写実をしていた。だがルネサンスでは、理想主義の写実だった。

中世後期では、キリスト教+アリストテレス+ラテン語が文化であった。だが近世にルネサンスがやってくると、ギリシャ文化とローマ文化が復古され、母国語、フマニズム (humanism) が重くなった。創造主 対 被造物 (人間) の関係が変わった。ルネサンスの人々は、ギリシャ語を学び、アリストテレス (Aristoteles) だけでなく、プラトン (Platon) が学ばれた。

アリストテレスは、キリスト教にとっては絶対であった。中世ではローマ教会は、バイブルが権威=オーソリティで、後期中世ではアリストテレス哲学がそれを助けていた。だが批判があらわれる。

ルネサンスの美術家は科学者をも兼ねた。肉体美を追求し、精神の革命をした。古典文化=人文主義を求めた。ちなみに古典作家は異教徒である。インテリは、中世ラテン語で生活し、文人は国際的だった。ここで自我の主張をした。これはイタリア都市市民の運動であった。彼らは、神に対して欠点は多いが、人間の理性、能力を正しく認め、主張しようとした。信仰だけでなく、自分の理性と意志で立とうとした。

新約聖書は本来ギリシャ語であった。当時はラテン語の聖書であった。ギリシャ語聖書を学んで、キリスト教聖書が間違っていることを発見し出した。そこから宗教改革が始まる。

一般の人は中世的生活をした。しかし煙突が作られる。教会が日常支配をし、僧侶が性的墮落をした。檀家の女性や尼さんを相手にである。

アラビア数字と計算、コンパス=羅針儀が、ヨーロッパに入った。ルネサンスは、イタリア以外、さしあたり広まらない。活版印刷で人文主義が広まった。

中世では教会が絵画を注文し、キリスト教、主に新約聖書を題材にした。宮廷あるいは貴族が肖像画を注文した。絵は注文生産であった。人々は文盲であった。

ゲルマン文化に対してラテン文化がよみがえった。ゲルマン人がラテン語を学ぶうち、ローマ文化とつながる。ローマ帝国の首都はコンスタンチノープルだった。だがカトリック世界ではイタリアが首都だった。

ルネサンスは単に古典復興ではない。都市の文化だった。地中海での交易で、西欧が、ビザンチン、イスラームと出会った。東方から学問と物産が来た。(ヴァザーリ『美術家列伝』)

中世ではカトリック教会が一大産業だった。だが海運業が出た。Renaissanceという語はフランスの歴史家ミシュレが初めに彼の『フランス史』第七巻で、今と少し違う意味で使った。ルネサンス芸術は、後に、絵ではフランドル絵画へ影響を与える。

芸術家は、肉体美を追求し、精神の革命をした。古典文化=人文主義を求めた。古典作家は異教徒である。インテリは、中世ラテン語で生活し、文人は国際的だった。ここで自我の主張をした。

ギリシャ語聖書を学んで、キリスト教聖書が間違っていることを発見した。そこから宗教改革が始まる。

町、業界、病は、守護神を持っている。例えば、サンタ・ルチアは目、サンタ・アンナは安産の守り神である。

ルネサンスは、イタリア以外、さしあたり広まらない。活版印刷で人文主義が広まった。

## 12世紀ルネサンス

東ローマ帝国(ビザンチン帝国)にギリシャ文化が伝わっており、公用語もギリシャ語になっていた。一方で、当時学問が最も盛んであったイスラーム帝国では、アラビア語で世界の学問が学ばれていた。12世紀のヨーロッパでそれらの学問の翻訳活動が活発となった。中心地は、シチリア王国の首都パレルモや、カステイーリア王国の都市トレドであった。

アラビア語からラテン語への翻訳は、プトレマイオス『アルmagest』<sup>(3)</sup>,

アリストテレスの幾つかの著作、アルキメデス、エウクレイデス、『コーラン』である。

ギリシャ語からラテン語への翻訳は、アリストテレス、プラトンの幾つか、ヒポクラテス、ガレノス<sup>(4)</sup>などである。

ラテン語に翻訳されることで、ヨーロッパの知識人はこれらを学ぶことが出来た。学問的には、12世紀にアベラールがスコラ哲学の基礎を作った。15世紀にイタリアで本格的なルネサンスが花開くのだが、それはこの12世紀ルネサンス<sup>(5)</sup>がある種の基礎になったが、その克服である。

古いルネサンスは、ヨーロッパで、3つの時期があり、1つは、カロリナー・ルネサンスである。8-9世紀の、カール大帝の文芸復興である。特にイギリスの文化を学んだ。2つは、12世紀ルネサンスである。

12世紀には、西欧世界がイスラム文明に出会った、アラビアの先進文明に接した。12世紀は、ローマ法の復活、ゴシック建築の成立、ポリフォニー音楽の成立で特徴づけられる。12世紀まで西欧は、ユークリッド、アルキメデス、プトレマイオス、ヒポクラテス、ガレノス、アリストテレスのほとんどを知らない。ギリシャの学問は西欧では途絶え、ビザンチンへ行き、アラビアに入る。

11世紀に、コンスタンティヌス・アフリカヌスがアラビアの自然学書や医学書をラテン語に訳した。

12世紀に、自然学者・医学者イブン・スイナーの書をラテン語にし、西欧人はアラビア語、ギリシャ語を学び、翻訳した。例えば、ゲラルドやアダレードである。アダレードは、ユークリッドの「原論」をアラビア語からラテン語に訳す。アラビア固有の学問も発達し、それらもラテン語訳される。

12世紀ルネサンスに内在的要因は、1 封建制の確立、2 農業革命、3 商業の進展、4 大学の成立、6 知識人の誕生。外的要因は、ビザンチンとアラビアからの文化の流入である。

スペインでキリスト教とアラビア文化が交流する。都市ではトレド、他にパレルモ、イタリアではヴェネチア、ピサである。クレモナのゲラルドが、

翻訳の巨人だった。シチリアはビザンチン領土だった。878年からイスラム、1060年以後ノルマンの支配であった。ここにギリシャ、ラテン、アラビアの文化が共存した。

ヴェネチアとピサはコンスタンチノーブルと通商し、ギリシャ文化を西に伝えた。ヴェネチアのジャコモがアリストテレスを翻訳した。

尊者ピエール (c.1054-1156) は、フランス人で、ベネディクト修道会士、クリュニー修道院長である。12世紀 修道院はクリュニー派とシトー派が盛んだった。ピエールは「トレド集成」をつくり、『コーラン』を翻訳させた。これでイスラムの全体が分かる。

バースのアデラード (c.1080-c.1150) は、南イングランドのバースうまれ、フランスで学ぶ、その後アラビアの新学問を志し、サレルノ、キリキア、シリア、パレスチナ、エルサレムで、7年間学ぶ。『自然の諸問題』を著す。多くのアラビア語の本をラテン語に翻訳し、それらはユークリッドの「原論」、アル・フクーリズミーの「天文表」である、

これまでヨーロッパでは自然を神の摂理として見た。しかし自然それ自体を合理的に見ようとする新しい動きがでた。

12世紀、フランス、シャルトルのベルナルは、司教座聖堂の付属学校で、自然学の研究を重視し、自由7科をおく。その後、学頭ティエリは、ベルナルの弟で、ギリシャ・ローマの大学者を扱う。ユークリッド、アリストテレス、ピタゴラス、プトレマイオス、などをである。つまり非キリスト教徒である。科学と信仰は矛盾しないとする。

アレクサンドロスの東征以後、ヘレニズムが引きつがれる。アラビアにギリシャの高い水準の学問が入った。とりわけヘレニズム時代の学問だった。西ローマ帝国にギリシャ科学はほとんど入らず。東ローマ帝国がひきついだ。

ヘレニズム科学は、5-7世紀に、シリア語に訳された。ついでアラビア語に訳されて、アラビア文化圏に輸入された。8-9世紀にギリシャ語から直接アラビア語に訳された。アラビア訳ヘレニズムがラテン訳されて西欧に入った。イスラム以前にアラビアで科学や哲学はなかった。

東ローマを追われたネストリウス派（両性論）<sup>(6)</sup>が、西アジアにギリシャ文化を伝搬させた。これは431年のエフェソス会議で異端とされていた。ネストリウス派は、エジプトへ、ついで西アジアへ移り、エデッサを拠点に、シリア語で布教した。

457年、東ローマ帝国のゼノン帝が学校を閉鎖し、彼らは迫害される。ササン朝ペルシャへ移住する。そして布教する。これは中国まで広がる。ギリシャ哲学の教化もする。ジューティ・シャープールに大研究所が建てられる。ユスティニアヌス帝がアテナイの学校を閉鎖したので、優秀な学者がここに来る。

異端の単性論者もギリシャの学問をアラビアに伝える。これは451年カルケドンで異端とされる。そしてビザンチンを追放される。

6世紀、ラシャイナのセルギオスが大学者で、シリア訳を多く作る。特にガレノスを訳した。他の大学者は、セヴェルス・セポフトである。シリア語のアラビア訳、ギリシャ語のアラビア訳、この2つで、アラビア・ルネッサンスが始まる。

サリー一族を滅ぼしたウマイヤ朝（スンニ派）が749年、倒され、アッバース朝（シーア派、ペルシャ人）ができる。ここはヘレニズムの伝統があった。首都をバグダッドにし、ジューディー・シャープールから多くが招かれる。815年、「智恵の館」をつくる。

翻訳の巨人は、1、フナイン・イブン・イスハークである。ヒーラフの出身で、ジューディー・シャープールの学校に入る。ビザンチンへ行き、ギリシャ文献を学ぶ。バズラからおよそ826年にバグダッドへきて、ガレノスの翻訳をする。フナインは、ネストリウス派のキリスト教徒だった。ついで、2、サービト・イブン・クッラである。ギリシャの異教徒である。

シリア・ヘレニズムは、5－7世紀、ビザンチンのギリシャ文明が中東地域一帯にシリア語に翻訳され伝達された文明移転だった。

アラビア・ルネッサンスは、8－9世紀、ギリシャの学術文明がバグダッドを中心にアラビア語化され、アラビア文明圏に伝達された復興された運動で

ある。アラビア学術は11世紀に頂点に達する。ギリシャ文明に、バビロニア、オリエント（エジプト以来）、ペルシャ、インド、中国の文明をとりいれる。

12世紀、西欧で大翻訳時代がくる。アラビア語のギリシャ学術と、アラビアの学術が、大量にラテン語化される。カタルーニアは一時、イスラムの勢力圏に入った。

アラビア文化に同化したキリスト教徒のスペイン人（＝モサラベ）がでた。

12世紀ルネッサンスは、スペインではカタルーニアのアラゴン派とトレドが中心となる。イタリアではパレルモのシチリア派と、ヴェネチア・ピサの北イタリア派がでる。スペインの代表者はクレモナのゲラルドである、12世紀以前の西洋は世界文明の辺境にあった。<sup>(7)</sup>

13世紀に、アルベルトス・マグヌス、トマス・アクイナスが、スコラ哲学を作る。アリストテレスとキリスト教を結びつける。トマスはナポリ大学で学んだ。これはアラビアびいきのフリートリヒ2世<sup>(8)</sup>が建てた。ナポリは当時アラビア文明をうけいれる前線基地だった。トマスは「対異教徒大全」を書く。ヨーロッパ思想の地盤を作り上げる。トマスは、A・マグヌスの弟子で、キリスト教とアリストテレスを統合した。パリ大学神学部にいた。

アリストテレスは初めアラビア語から、後にはギリシャ語からラテン語訳された。13世紀にアラビア的に解釈されたアリストテレス、つまりアヴェロエス主義がはやる。

13世紀、クロステスト、ロジャー・ベーコンがでる。R・ベーコンはアラビアのイブヌルハイセムの光学を学ぶ。近代科学は14世紀のスコラ学者から始まった。

ユダヤ人がスペインから追放された、1492年以来である。

## エメラルド・タブレット

12世紀のヨーロッパに出現したエメラルド・タブレットなるものがある。ヘルメスあるいはヘルメス・トリスメギストス（後述）が書いたと思われる

いるもので、残っているのは短い文章である。錬金術の奥義が記されているとされるが、その碑文本文はない。6－8世紀のアラビア語の作品で、9世紀前半に作られたとされる文書がある、12世紀にアラビア語からラテン語に訳された。

(参考) M・ドウリル『エメラルド・タブレット』龍王文庫。

苗村吉昭『エメラルド・タブレット』濤標

アトランティス人 トート『エメラルド・タブレット』M・ドリール編、霞ヶ関書房。

## イタリアのルネサンス文学

### ダンテ・アリギエーリ

ダンテ・アリギエーリは、フィレンツェで1265年に生まれた。ギベリーニ党=皇帝派と、小貴族や商工階級からなるグェルフィ党=教皇派とがあった。ダンテ家は没落小貴族なのでグェルフィ党だった。5才で母をなくし、妹がいた。父は再婚した。相手には子供が2人いた。12才で父をなくす。

ダンテは1289年、カンパルディーノの戦いに参加した。アレッツォ中心のギベリーニ派に勝つ。フィレンツェはグェルフィ派のものになる。ギベリーニ党の名門の娘ベアトリーチェに二度会う、二度目は1283年であった。ベアトリーチェは、銀行家のフォルコ・ボルティナーリの娘で、ヴィア・ディ・ストーディに住んだ。シモーネ・デ・バルディに嫁ぎ、1290年、25歳で死んだ。ダンテの理想の女性であるというのは虚像である。当時、詩人は勝手に理想の女性を作った。それにベアトリーチェの家は豊かで、ダンテの家は豊かではないし、政敵である。

ダンテは1295年に結婚する。フィレンツェの委員になる。1298年、百人委員の1人になる。フィレンツェ内でグェルフィ党は白派と黒派に分裂し、白派は富裕市民層、少数の貴族の代表=教皇に批判的で、フィレンツェの自立



をもとめ、黒派は民衆の支持＝教皇に好意的で結びつこうとし、封建貴族を支持した。1300年、ダンテは市統領6人の1人になる。1301年、ローマ特使に3人のうち1人になる。

1302年、ダンテはローマにおり、フィレンツェから永久追放された。1302. 1. 27、捕まったら焚刑とされた。黒派がフィレンツェで勝利し、ダンテは白派だったからである。その白派内部でも争いがあったが、ダンテ1人の道を行く。亡命する。アレツツオへ、1303年にヴェローナへ、1308年トスカーナへ。1309年にルッカにいる。1310年ルッカを去る。1315年ヴェローナへ、1317年ラヴェンナ、1321年ラヴェンナで病死する。<sup>(9)</sup>

「神曲」でルネッサンス文学が始まった。まずイタリア語で書かれ、ギリシャ・ローマの文明を紹介したからである。

「神曲」で、ダンテはイタリア語（トスカナ地方語だが）を高級な語にした。これまで文学はラテン語で書かれていた。それに概して、ラテン語より母国語の方が微細で豊かな表現ができるし、より多くのイタリア人が読める利点がある。「神曲」は初め、タイトルは「コメディア」であって、後に「神・・」とつけられた。

この書は詩であり、ウェルギリウス<sup>(10)</sup>の「アエネイス」を導きにした。巨大な想像力と構想力で書かれた。ダンテの広い古典の知識にもどづいている。ギリシャ神話から多く持つてくる。

彼はキリスト教徒の立場から書いている。そのため、ギリシャ、ローマの人々は異教徒となってしまう、多くの有名な人々が地獄にいる。その他、多くはイタリア人が出ているが、当時の人は知っていただろう。

本書は三つの部からなる。地獄編、浄罪編、天堂編である。あるいは、地獄、煉獄、天国である。地獄、煉獄<sup>(11)</sup>、天国は、当時の人に最も関心あっただろう。初めは地獄編であり、地獄では、ダンテはヴァージル（ウェルギリウス。ここではウェルギリオ）に案内される。煉獄の終わりから、ダンテはベアトリーチェに案内をして貰う。

後年、ボッティチェリがメディチ家のロレンツォの従弟ロレンツォ・

デイ・フランチェスコに頼まれて挿絵を描く。ダンテのデス・マスクはフィレンツェのヴェッキオ宮殿にある。<sup>(11)</sup>

### ペトラルカ

フランチェスコ・ペトラルカ（1304-1374）は、アレッツオうまれ、ボローニア大学へ入学した。当時最高の大人文学者である。古典文学を研究し、試作した。聖職に就く。愛人ができ、こどもを2人つくる。しかしラウラが永遠の恋人だったが、これも詩的虚構である。『カンツォニエーレ』が代表作である。1341年、桂冠詩人となる。父の故郷フィレンツェへ行く。ちょうど「デカメロン」を書き始めたボッカチオがいて、2人は共鳴する。

住んでいたアヴィニオンを見限って、詩人はミラノへ行く、君主はヴィスコンティ家だ。ペトラルカはかつてミラノの領主で大司教ジョヴァンニ・ヴィスコンティを政治的に非難していたのに、彼の賓客になった。結局8年いた。ボッカチオは手紙で非難した。しかしペトラルカは無定見で、不偏不党とか、王宮嫌悪は、格好付けだった。

彼は、ラテン語で書かなければ優雅な作品にならない、と考えた。ギリシャ語講座を開く。「デカメロン」の1編を無償でラテン語に訳してやった。ボッカチオに、「デカメロン」をイタリア語でなく、ラテン語で書くべきだったと言う。彼はダンテの存在を知らなかった。ボッカチオと知り合って、教わった。1374年7月30日、70歳で死す。古典・古代の文化の研究をし、広めた点でルネサンス人である。<sup>(12)</sup> イタリアの古典復興はペトラルカによる。

### ボッカチオ

ジョヴァンニ・ボッカチオ（1313-1375）は、フィレンツェ近郊チェルタルドに1313年に生まれた。<sup>(13)</sup>

父ボッカチオ・デイ・ケリーノは、チェルタルド出身である。愛称はボッカチーノである。父はこの町の農家の出で、13世紀末に生まれた。彼は農業でなく商売をしたいと、兄弟とフィレンツェへ1312年に移住する。彼は両替

商になった。父と兄弟は、パリに出て商売、つまり両替商をした。そして数年とどまった。

父は、あるパリ娘ジャンヌを口説き、1313年、子を産ませる。これがボッカチオである、とされる。そこで母親はパリ娘ジャンヌである、とされた。しかしそれはボッカチオの思い過ごしだろう。彼は、父がわが高貴な母を誘惑して捨てた憎いペテン師だと考えた。彼の母親は分からず、ジョアンナ未亡人か。

父は後にバルディ商会に雇われ、組合の参事になる。マルゲリータ・デ・マルドークと結婚した。マルゲリータは息子フランチェスコをうむ。ボッカチオは家庭教師につき、ダンテを読む。ボッカチオは7才で詩を書く。

13世紀末、グェルフィ党がフィレンツェの牙城であった。1260年、法王庁がアンジュー家のシャルル・ダンジュー（カルロ1世）をナポリに招いた。それでナポリもグェルフィ党の支柱になった。フィレンツェが金融でナポリを支えた。フィレンツェの大手金融業者、バルディ商会などが、ナポリへ来た。

1327年、父がバルディ商会の代理人としてナポリへ招かれる。一家は移る。父は、1327-8年にバルディ商会の代理者、1329年にロベール王の政庁使節、1332年にバルディ商会のパリ駐在員だった。たいへん裕福だった。

ボッカチオはナポリの場末、まずしいボジーリポ地区に住んでいた。ナポリの君主政体をボッカチオは好意的に見ていた。ボッカチオはバルディ商会支店で実務を習う。だが文学に没頭し、ダンテに憧れる。1329年、父はナポリのロベール王の助言者になる。ボッカチオに法律を学ばせる。彼はダンテの友人チーノと知り合う。多くの文人に紹介される。宮廷図書館に通う。ギリシャ語を勉強する。物語をおもしろおかしく語る、才気煥発だった。

ナポリで、ボッカチオ本人も父も、彼が商売に向いていないことがわかり、父はボッカチオに法律・教会法を学ばせる。1331-6年までであった。教会で採用してくれるだろうと父は思った。ボッカチオは著名人の社会を求めた。社交界に入った。画家ジョットとも交わった。当時のナポリは素晴らしかつ

た。ロベール王は身内を失い、後に孫娘ジョアンナ（ジャンヌ）が王になる。王は放蕩で、貴婦人らに子を産ませた。

ボッカチオは、多くの文人に紹介される。カルメータに会い、天文学を学ぶ。ジェノアの天文学者ネーグロにも会う。ロベルト（ロベール）1世の図書館係と会う、そして宮廷図書館に通った。

1336年3月30日 美女フィアンメッタがサン・ロレンツォ教会ナポリに現れる。多くの男性が彼女を賛美した。マリーア・ダクイーノという。貴族の娘で、ロベール王の臣下と結婚していた。ボッカチオはマリーアを教会で見て、恋をする。ナポリ王ロベルトの庶子だった、というのは仕組まれた伝説（ヴィルラーニ、p.18）だった。当時、女子修道院がサロンであり、ここでボッカチオは彼女に会う。そして当時の有名な恋愛小説について語り合った。彼女からこの話を俗語（つまりイタリア語）で書いてくれと言われ、「フィローコロ」を書いた。恋をして半年間ボッカチオは彼女に言い寄る。1336年に恋が成就した。ボッカチオは詩や歌を彼女に献じた。彼女は浮気であって、本気ではなかった。ボッカチオにお金がなくなり、縁がきれた。1339年、フィアンメッタとの決定的な破綻となった。悲嘆を和らげようと、古典の研究をし、それで『テーセウス』を書く。主人公はアテネの英雄である。これは後の有名詩人、ポリツアーノ、アリオスト、タッソーに影響した。

バルディ商会とペルツイ商会は、英のエドワード3世に融資し、それが返済されずに1339年に倒産した。それに政争が加わり、父はフェレンツェへ戻る。ボッカチオを遅れて故郷に呼びよせた。彼はマリーアを思い切れないまま、1348年、フィレンツェに帰った。ペトラレルカがナポリに来るというのに。

1340年10月、ボッカチオはナポリを去ってフィレンツェへ戻った。ボッカチオにとってナポリは自由、勉学、恋愛の地で、フィレンツェは商人共和国の実利的、係争好き、芸術にまだ無関心で民主主義の騒乱の地、だった。1341年1月にはフィレンツェに父子が住む。この時までには父は妻と子を病死で失っていた。ボッカチオだけ残った。

父は1341年、ピチェと再婚した。ボッカチオは1341-2年に恋をし、父親になる。父の子で、弟になるヤコボ（1343年生まれ）の後見人になる。

ボッカチオは非常に多くの作品をかく。『フィアンメッタ』が1343年初に書かれた。彼は十分に稼がない。父は援助を与え続けた。ボッカチオは秘書として2つのところに滞在した。ボッカチオは北イタリアを、文人として職探しをした。その間いくつか作品を書く。フィレンツェで前述の『テーセウス』を書いたわけである。ボッカチオは『アメート』を1341年に書く。フランスの影響から古典の影響が変わる。

1347年、ペストが襲った。コンスタンチノーブル、キプロス、シチリア、サルディニア、マジョルカ、その後マルセイユ、ヴェネチア、1348年に、アヴィニヨン、フィレンツェ、イギリス、1349年に北欧、その後、ロシアであった。ヨーロッパの人口1億のうち2千5百万が死んだ。人間関係も壊れる。病菌をばらまいているという噂で、ユダヤ人が殺された。菌を運ぶクマネズミは十字軍の船にのって東方からやってきた。

14世紀初、飢饉があった。森林伐採、都市人口の過密、生態系バランスの破壊、経済成長による環境破壊があった。1330年に、噴火、地震、暴風、イナゴの大群が起きた。13世紀は成長の世紀だったが、14世紀は危機の世紀だった。

ボッカチオはアルノ河畔の父の家に住み、フィレンツェとチェルタルドに住む。

娘がフィレンツェで死んだ。1350年、父もペストで死ぬ。ボッカチオは新作を書き始める。「デカメロン」だ。

1350年から役職につく、ロマーニアへの使節だ。ダンテの娘ベアトリーチェは、ラヴェンナの修道院に住む。お金を届ける用事ができた。

ボッカチオはペトラルカを非常に敬愛した。彼がフィレンツェに来ることになった。ボッカチオは歓迎の詩一編を呈した。1350年10月半ば会う。ボッカチオとペトラルカは友人になる。ペトラルカはローマへ行き、帰りにまたフィレンツェに寄る。

1351年、ペトラルカをフィレンツェに呼ぶ計画がでる。ペトラルカの父の有罪判決を取り消し、財産没収を取り消し、遺産を採りにくるようにと、また学校をつくりその教授職を与えると。そこでボッカチオが1351年4月、ペトラルカの住むパドアへ交渉に行く。だがペトラルカはプロヴァンスへ行ってしまった。フィレンツェ支庁は怒り、ペトラルカの父の決定を取り消した。でもボッカチオはパドアでペトラルカと長い学問的な話をした。

その後、ボッカチオはチロルへ外交交渉に出かける。

ジャンヌと夫ルイ・ド・タラントの支配下のナポリで、家令ニコロ・アッチャイウオールは、その主君の宮廷に著名文人を集めようとした。ペトラルカ、ボッカチオに声を掛けた。が、ザノービ・ダ・ストラダだけが応じた。その後ボッカチオはナポリへ行く。

一方、ペトラルカはプロヴァンスをあとにし、ミラノに滞留した。

1351年、ボッカチオは、フィレンツェの市政に参加する。財務官になった。ボッカチオは庶子5人を持つ。娘ヴィオランテ（1348年生まれ）を亡くす。他の子も彼より先に死す。フィレンツェに大学を建てる計画に参加した。1360年、レオンツイオをギリシャ語教師に大学で採用させる。

1359年3-4月、ボッカチオはミラノのペトラルカ家に逗留した。決定的な影響を受ける。ペトラルカが「神曲」をもっていない、中身を知らない、きちんとよんだことがない、と知っておどろいた。そこで、その本を送った。ペトラルカの影響で古典注解に向う。ペトラルカは古典ギリシャ語をよく読めない。

1359-60年、ギリシャ語ができるというピラトを、ボッカチオはうまくトスカナへ呼び寄せた。1362年まで3年近く彼を自宅においた。あてにならないひとだったが、ホメーロスを原文で読めるようになる。「イーリアス」のギリシャ語原典をみつけたのだ。ホメーロスを翻訳させる。

ペトラルカは後に読んで、文学作品（つまりデカメロン）なら、ラテン語で書くべきだと言った。ボッカチオはラテン語を学ぶ。1360年、聖職を得る。

1362-63半年、ボッカチオはナポリに滞在する。ナポリから資料編纂官と

してきてくれないかと言われ、10月末、ナポリに向かう。ひどい扱いを受ける。商人カヴァルカンティと友になる。

ボッカチオはヴェネチアのペトラルカの元に行き、滞在す。ヴェネチアからチェルタルドへ帰る。

1362年5月、ボッカチオはフィレンツェにいた。62年11月から63年4月までナポリにいた。8月までヴェネチアにいた。

1365年夏、公職を引き受ける。法王向け使者になって、アヴィニオンへ行く。1357年11月-1368年2月、二回目の使節になる。

「神曲」を注釈する作業が、フィレンツェから法王庁に誓願された。ボッカチオが講義することになった。1373年10月から74年初めまで、ほぼ毎日教会で行った。しかし病と、学問の大衆化は誤りという動きで、やめる。彼はタキトスを初めて読む。中世を通じて忘れられていた。

1374年7月、ペトラルカが死ぬ。1375年12月21日、ボッカチオがチェルタルドの家で死す。<sup>(14)</sup>

## Decamerone

ボッカチオは、個人の価値こそが唯一の高貴さであるとする。庶民であり続け、大貴族や高官の敵である。フィレンツェが庶民の政府の下で高度の繁栄に達したことを誇る。傲慢、羨望、貪欲が、厄災を及ぼすとする。

「デカメロン」を1349-51年に書く。イタリア小説中最高傑作とされる。イタリア語散文の基礎になった。1353年に書き終えた。「デカメロン」では性愛を肯定し、謳歌する。構成の先例は「アラビアン・ナイト」である。『フィローコロ』を発展させた。一部を完成前に発表した。

時代背景は、1347-49年のペストである。イタリアと全ヨーロッパに広がった。48年春のフィレンツェではとくにひどい。フィレンツェで5万人が死んだ。そのときボッカチオはフィレンツェにいなかった。

ナポリ時代の話を持ってきた。『デカメロン』の話は創作ではない。船乗り、商人、巡礼、十字軍兵士が外国から話をもってきた。

作者不詳の短編集『ノヴェリーノ』、古代の作家アブレイウス、同時代人の記録、『パンチャカンドラ』、『リディーアの喜劇』。民間・地方伝承、中世のラテン語編集本、フランスの文学的伝承、を利用した。

新しい人生観で元の話をもとを変えた。女性読者に気晴らしを与えた。愛は尊敬すべき物で、性愛を謳歌した。悲恋も書く。実際にあった話を脚色した。僧侶、修道女院を愚弄した。当時の階級制がでていいる身分違いの恋の物語も入れる。彼は貴族と平民を差別している。小説での話は、自分の体験、聞いたこと、ギリシャ・ローマの昔の文献から、である。

不幸な恋人たちの話がある。疑い深い夫に、妻が恋人を作ることを肯定している。当時イタリアでは、代父、つまり子の名付け親は、その母と関係を持ってはいけないとされている。「神父や修道士やすべての聖職者たちが、どんなに私たちの心の誘惑者であるか……」(八日目第4話)を描いた。「デカメロン」が教会から断罪される内容であり、宗教人から「デカメロン」は悪書の代表と言われた。ボッカチオは悩む。「デカメロン」をまねてサケッティが「ルネッサンス巷談集」<sup>(15)</sup>を書く。しかし「デカメロン」の方が艶がある。

彼の他の著は、『名士列伝』で、九冊、1355-1360年に編集した。そして『名婦列伝』<sup>(16)</sup>である。大作『異教の神々の系譜』全15巻、これはユージ4世の依頼である。

## 東西教会の合同の試み

古代ローマ帝国の末期から帝国の東西は分離していた。同時にキリスト教が国教になった。ゲルマン民族の大移動で、ローマ帝国の西半分が倒れた。ゲルマン人たちは、キリスト教の激しい権力闘争の中で、徐々にカトリック化していった。ローマ帝国の東半分は独特のキリスト教が発展した。東方教会あるいはギリシャ正教である。1054年に東西教会は分裂した。大シズマという。ローマ教皇(西)と総主教(東)が互いに破門しあった。だがもともと東西の差は拡大していた。



ドイツのコンスタンツで、1414から1418年まで公会議(Council)が開かれ、3人の対立教皇の存在を廃止し、教会大分裂を終結させた。またウイクリフ<sup>(17)</sup>とその影響をうけたヤン・フス<sup>(18)</sup>を有罪とした。

コンスタンツ公会議の決定をうけて、教皇マルティヌス5世<sup>(19)</sup>は、公会議を開こうとしたが、果たせず、結局1431年にスイスのバーゼルで開くことができた。同教皇は病没し、エウゲニウス4世<sup>(20)</sup>が引き継いだ。開会はしたが、ほとんど参加者は集まらなかった。教皇は来なかった。公会議支持派と教皇支持派が争った。公会議はフス派<sup>(21)</sup>の問題にも一定の解決を見た。

だが、オスマン・トルコ<sup>(22)</sup>の興隆とその脅威から、同じキリスト教は合同するか、すくなくとも協力する必要があると思われ、合同の為の公会議が開かれることになった。それをどこで行うかで、1437年に決裂した。この分裂後、教皇らに反発してバーゼルの残り対立教皇を選んだグループもいた、

公会議ははじめフェラーラで1437年から開かれた。だがコジモ・ディ・メデイチの提案で、フィレンツェに移ることになった。彼は教皇領の会計主任をしていた。フィレンツェ会議が1438年に始まった。サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院で行われたのである。

このサンタ・マリア・ノヴェッラ会議の前後に、多くのギリシャからの知識人が来て、あるいは亡命した。この1439年のフィレンツェの公会議に、アロンソ・ボルジアもバレンシア司教区、アラゴン施設団代表として出席した、その際、ギリシャの総主教ヨハネス・ベッサリオンやジュリアーノ・チェサリーニ枢機卿は、統一と改革の旗手だった。アロンソもその名を挙げた。

## サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院

サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院は、10世紀にあった。1094年に建物奉納がされた。1279年に教会の着工式があり、設計はドミニコ会士設計士らであった。1287年、広場建設が命じられ、ドミニコ修道会に与えられた。ここで祭事や馬上槍試合が行われた。1357年にこの壮大な建築が完成された。

1420年、この新しい教会の奉納が行われた。ゴシック様式の着想であった。<sup>(23)</sup>

コジモ・ディ・メディチがフィレンツェで会議を開かせ、面倒をみたのは、もちろんメディチ家を誇示するためであった。

有名な会議が行われてから、高名な芸術家の作品が寄せられた。15世紀に、アルベルティが一部ルネサンス的ファサードをその上部につくった。ブルネレスキの「十字架上のキリスト」彫刻、ジョット「キリスト磔図」、マザッチョ「三位一体」、リッピ「ストロツツイ家の礼拝堂」がある。

## フィレンツェ

フィレンツェは、ローマ人が花の女神フローラにちなみ、フロレンティアと命名した。それ以来フィレンツェと言われる。

国家的な規模で近代を作ったのは、後のオランダやイングランドだが、都市の規模で近代を作ったのは、ヴェネチアやフィレンツェである。両都はジェノアと並んで、市民の都市となった。これらの都市は自由にお金儲けができる体制である。それにより、これらの都市は発展したのだった。

フィレンツェはトスカナ地方にある。B.C.10世紀、エトルリア人が集落を形成した。11世紀にトスカナ有数の都市になる。12世紀初め、自由都市＝コムーネになる。自治権が確立した。1182年前後、フィレンツェは自由都市として記録される<sup>(24)</sup>トスカナで最も繁栄している町となり、13世紀にヨーロッパで最も繁栄する。13世紀にフィレンツェは毛織物工業で豊かに成り、その富を建築に向けた。同業組合が基礎になった。大組合＝アルテ・マジオーレが32、小組合が14作られた。織物業と両替商が力を持った。

フィレンツェは、13世紀ころから工業で発展し、金融でも発展した。イタリアで、都市共和国、自治都市が発展した。フィレンツェでは1300年代から初期ルネサンスが発達する。イタリアで豊かな農民と商人が生成した。戦争が続いた。冒険商人が登場した。都市が生まれ、領主の支配から離れる。

1250年のフリートリヒ2世の死後、1250年、富裕市民らが貴族たちに反抗

し、コムーネの権力を握り、第一次平民政府を作る。貴族階級はギベッリーナ党、工場主や商人階級はグエルフィ党に入る。グエルフィ党はギッペリーナ党を追放した。しかしギッペリーナ党はグエルフィ党を1260年のモンタベルディで破る。それで第一次平民政府は壊れる。1268年ホーエンシュタウフェン家がココッツォの戦いで敗北し、再びグエルフィ党が1282年に第二次平民政府を作った。

フィレンツェでは12から13世紀に自治共和国を作った。1283-4年に、貴族や豪族がが政治的職務につけないという、「正義の協定」を作った。そこで商人や銀行家が政権を担った。フィレンツェは共和国だった。教皇国家やイタリア諸大国と戦った。フィレンツェでは資産は大商人・織元に集中していた。

諸党派ができ、1434年、メディチを中心とする党派が勝ち残った。メディチ家は形式上は合法的な権力を独占した。同家は銀行業が主で、ヨーロッパ中に支店を持ち、ヨーロッパ全域の商業に携わり、大財閥になった。

5万人の人口のうち5-6千人が交代で市の役職に就いた。人民大評議会があった。しかし大小アルテ（=組合）のみの権限であった。この2つの組合が土地貴族と戦って勝ったのだった。13世紀末にはこの2つの内部で争いが起きた。フィレンツェは同業組合国家であった。14世紀中ば、3千人が参政権を持った。

フィレンツェだけでイングランドの総生産を上回った。商人や銀行に力があつた。フィレンツェは、小切手、信用手形、担保、複式簿記を発明した。株式会社ができた。羊毛染色が重要な仕事だった。

市民は民主制に執着した。だが初めはアルピッツイ家が陰で支配していた。フィレンツェは12世紀以来の共和国で、15世紀後半に花開いた。初期ルネサンス時代である。

## 教会分裂

教会大分裂という時期があつた。前述のローマ帝国の東西の分裂によって

起きた教会分裂の方が大きい，しかし次の分裂も大分裂と言われる。

1309年のクレメンス五世から教皇がアヴィニヨンに移された。だがローマ帰還が望まれ，1377年，グレゴリウス11世がローマに帰還した。しかし1378年に彼は病死した。またイタリア人とフランス人との枢機卿が対立し，ウルヴァヌス6世としてイタリア人が選ばれる。しかし選挙がやり直され，クレメンス7世が選ばれた。ウルバヌス6世はそれを認めず，アヴィニヨンへもどった。こうして2人教皇となり，1378から1417年まで2人教皇制が続いた。

表にすると，

ローマは，ウルバヌス6世 1378-89年

ボニファティウス9世 1389-1406年

インノケンティウス7世 1404-06年

アヴィニオンは，クレメンス7世 1376-94年

ベネディクトス13世 1394-1417年

それに加えて一時は公会議派の教皇が立てられ，それは，

アレクサンデル5世 1409-70年

ヨハネス23世 1410-15年 である。

1378から1417年まで，複数の教皇がいた。最終的には マルティネス5世が統一教皇となった。この間，調停機関もなくなったので，百年戦争などが起きたのだった。

## メディチ家

その後のフィレンツェの金持ちは，メディチ家で，薬屋から銀行家になった。初め薬種商で，明晩を商って栄えた。14世紀に銀行家になった。メディチ家は，フィレンツェの銀行家・政治家で，後にトスカナ大公国の君主となる。ここでは後の話は略する。

メディチ家は，ポッティチェリ，レオナルド，ミケランジェロ，などのパトロンとなり，ルネサンスを育てた。

初めアヴェラルト・ディ・メディチ（-1383）が政治的略奪をもとに銀行を開いた。

その子ジョヴァンニ・ディ・ピッチ・デ・メディチ（1360-1429）が、銀行業で大成功した。彼は、銀行業で成功した親類のヴィエーリ・ディ・カンピオ（1323-1395）のもとで学んだ。そしてローマ、ヴェニスに支店を置き、メディチ家の基礎を作った。スキャンダルの対立教皇ヨハネス23世を立てたから、ローマ教皇庁の財務管理者になった。この家は貿易業と金貸し業であった。14世紀末に銀行を作った。教皇を得意先にして貸した。1421年、ジョヴァンニ・メディチが「正義の旗手」=総督に選ばれる。メディチ家は、大銀行家、新興成金であった。資本に7%の税を課した。

### コジモ・ディ・メディチ, いわゆる老コジモ

その子コジモ・デ・メディチ（1389-1464）は、蓄財をし、国際金融をし、市の実力者になる。政敵を倒し、フィレンツェの政治的実力者となった。彼は、造営事業をし、学芸を保護し、学芸・美術品を集めた。コジモ・イル・ヴェッキオは、つまり老コジモと呼ばれたコジモは、フィレンツェの政治的実権を握る。ヨーロッパに支店を出し、ヨーロッパ有数の大富豪になる。

コジモは古代の芸術品を集めた。サン・マルコ修道院の中庭に、ローマの彫刻があつめられた。そこに裸婦像があり、それは海から産まれたばかりのヴィーナスである。これをポッティチェリは絵画にする。「ヴィナスの生誕」である。

メディチ家は、芸術家・建築家を保護した。例えば、有名なポッティチェリ（c.1444-1510）やミケランジェロ（1475-1564）が集まる。ヴィーコ、フィチーノを保護した。コジモは、フィリポ・ブルネレスキやドナテッロを庇護した。彼は66万フロリンを町に投じて、寺院、病院、城塞、邸宅を建てさせた。彼は、蔵書を買取り、図書館に寄付した。フィレンツェの知識人はすべてコジモを敬愛した。

彼は、ローマ、アヴィニオン、ブリュージュに、メディチ銀行を開いて、フランス王、イギリス王、法王庁、ヨーロッパの諸侯、大貴族、商会、企業に、膨大な貨幣を貸し付けた。

老コジモは、政治・行政の前面に出ることはなかった。市政委員の1人にすぎなかった。しかし最高評議会の委員はみなメディチ家ゆかりの者か、友人であり、敵対者も、結婚、貸し付け、寄付で、メディチ家に引きつけられた。

彼はメディチ家別邸で饗宴をした。老コジモの悪口を言う人はいなかった。彼は腰が低く、謙虚だった。

1433年、ルナルド・アルピッツィのクーデタあるいは政治的陰謀で、コジモは1433年、逮捕され、処刑されることを追放となる。一時追放でヴェニスへ移った。だが、アルピッツィ家の失脚で、コジモが一年後1434年に帰還した。帰ってから、アルピッツィ家のリナルド、オルマンツォ、ステファノを絞首刑にした。

メディチ家の大番頭は、フランチェスコ・サセッティだった。コジモは、トスカナ最大の資本家だった。反乱を私財で鎮圧する。コジモ本人は市の要職につかなかった。しかし親類が全部フィレンツェで要職についた。累進所得税を世界最初に、課した。銀行もしっかり業務する。ヴァチカンの金融を独占した。

メディチ銀行は、ヴェネチアもナポリも支えた。イタリア4強を団結させた。このためルネサンスが生まれた。

コジモ・ディ・メディチは自派の権力が安定すると、市民の反感を避けるために、官職にはつかず、市民の歓心を買うために、公共事業に私費を投じた。14世紀にここでルネサンスが起きた。

一方、絹織物組合は棄てて子育成院を援助した。建物はブルネレスキの作である。1425年、サン・ジョヴァンニ礼拝堂の「天国の扉」がギベルティに依頼された。

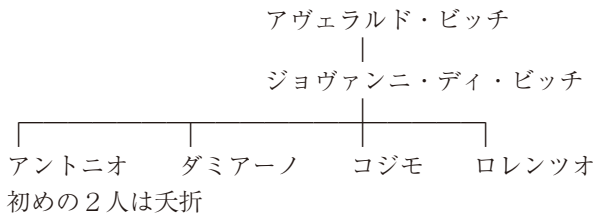
コジモの庶子カルロは、枢機卿になる。

コジモは、フラ・アンジェリコ、パオロ・ウッチェロ、ブルネレスキに注文を出し、ドナテッロを気に入る。哲学を愛し、絵画 彫刻 建築を支援する。

老コジモ（1389-1464）が亡くなったとき、陰謀が起こされようとした。コジモ・イル・ヴェッキオのヴェッキオとは老を意味する。息子ピエロのなくなる時も警戒された。

コジモは1464年8月1日に死し、花の聖堂で葬儀がされた。老コジモに庶子・長子ジョヴァンニがいた。そのジョヴァンニが1年前に死んだ。

フィレンツェでメディチ以外に有名なのは、パッツィ家、ソデリーニ家、ピッティ家、ネローニ家、バルディ家、アッチャイウォーリ家である。



## ルネサンス学問の開始

フィレンツェ会議の後、フィレンツェへ、ヨハネス・ベッサリオン（1399? -1472）は残る。彼は東ローマ帝国の出身で、人文学者だ。正教会に属した。ニカイアの府主教だった。プレトンとともにフィレンツェ公会議を訪れた。合同賛成で、フィレンツェ会議後、カトリックに改宗し、その聖職者になる。1439年に枢機卿になる。イタリアにプラトン哲学を教える。ベッサリオンは「プラトン注解」を出す。

コジモが作った人文主義サークルに、ギリシャ人哲学者プレトンが長になる。ゲオルギウス・ゲミストス・プレトン（1360? -1452）は、東ローマ帝国のプラトン学者。ミストラスの人、フィレンツェにしばしば滞在し、古代ギ

リシャ文明の復興を力強く主張する。帰国する。プラトンは、コジモにフィレンツェでプラトン・アカデミーを作るべきだと考えさせた。

1453年、東ローマ新しい時代に帝国が減び、ギリシャの学者がイタリアに亡命した。彼らはコジモに歓迎された。コジモはフィチーノ（1433-99）にプラトン作品をラテン語に訳させた。彼は大学者になる。フィレンツェのプラトン・アカデミーができた。

コジモは、アテネ、コンスタンチノーブル、アレクサンドリアでの古典集めで、財産を投げ出す。フィレンツェ公会議以降、東の学者は、プラトン、アリストテレスを豊かに引用し、語るの、西の学者はびっくりする。プラトンかアリストテレスかの、大論争が起きる。フィレンツェではプラトンに熱中する。プラトン・アカデミーができる。フィチーノを主任にする。彼らはプラトンに熱中する。各地から人が来る。ビーコ・デ・ラ・ミランダ、ミケランジェロも、メディチ家に集まった。

メンバーの1人は、アンジェロ・ポリツアーノ（1454-1494）で、詩人であり、「イーリアス」を訳した。ロレンツォの秘書になった。その長男ピエロの家庭教師にもなった。

マルシリオ・フィチーノは、1433年、フィレンツェに近いフィッリーネ・ヴァルダルク村に生まれ、1450年代にフィレンツェ大学で、論理学、自然哲学、人文科学を学んだ。医学の教育も受ける。フィレンツェ大学といっても1321年創立のストウディウム・ゲネラーレである。彼はラテン語とギリシャ語をしっかりと学んだ、父はメディチ家の侍医・外科医であった。1456年にギリシャ語を勉強しはじめた、プラトン哲学の原典を検討するためだった。

メディチの別荘がフィレンツェ近郊カレッジにあった。1462年、コジモがフィチーノに、フィレンツェ近郊のカレッジに家とプラトンのギリシャ語写本を与えた。この近郊の農地も買って、その地代で彼が生活できるようにした。この彼のプラトン・アカデミーは、友人たちのサークルだった。マルシリオ・フィチーノが古典学で有名になり、チェスの名人マグリーノもコジモの援助を受けた。



フィチーノはフィレンツェのメディチ別邸で午前中は研究と翻訳をした。プラトン翻訳はコジモの「ヘルメス文書」入手で中断された。「ヘルメス文書」の翻訳を先にしてくれと、コジモが頼んだからである。かれは、魔術思想、神秘思想を研究した。

1463年、フィチーノはヘルメス文書の翻訳を完成した。ラテン語訳であり、「ピマンデル」という表題であった。それからプラトン対話編を訳した。プラトンのラテン語訳10編ができて、コジモの死の直前にフィチーノはそれらを読み上げた。コジモが1464年に死す。その印刷はその後である。1469年以前にプラトン翻訳を完了した。1469-74年に、「プラトン神学」を書いた。フィチーノの学問はルネサンス期の新プラトン主義とされる。

フィチーノの著書が、『プラトン神学』（1474年筆）である。ここで彼は靈魂不滅説を出す。『愛について』（1475年筆）で彼は、プラトンの愛を論じ唱えた。これは神への愛だが、後年誤解された。フィチーノはキリスト教とプラトン神学とが調和しているとした。他に、『三重の生』、『キリスト教について』がある。

彼は占星術に深い知識を持った。彼は、プラトン、プロティノス、ゾロアスター、聖アウグスティヌス、ヘルメスを学んだ。若い時には、スコラ主義、アリストテレスをしっかりと学んだし、トマス・アクイナスも学んだ。

フィチーノは自分の作品の幾つかをトスカーナ語で書き直した。

フィチーノは1473年終わりにフィレンツェ大聖堂の司祭になる。彼はキリスト教に十分な知識をもち、正統派信仰者であった。最後にフィレンツェ大聖堂の参事会員になる。1484年以降、プロティノスを翻訳、注解し、1492年に印刷した。フィチーノは1494年、メディチ家追放で引退した。1499年に死す。彼の思想は18世紀まで影響を与えた。

教皇もルネサンス芸術家を保護した。ビザンチンから逃げた学者がルネサンスの種をまいた。

## 『ヘルメス文書』

コジモ・デイ・メディチが待ち望んだ書、ヘルメス・トリスメギストスの「ヘルメス文書」は、B.C.1 - A.D.3世紀に書かれた。最大の錬金術書であるとされるが、どうだろうか。著者はその始祖で、複数の著者だったとされる。この名は、3倍偉大なヘルメスという意味で、ヘルメスは、ギリシャ神話の神で、ゼウスの子、旅人、商人の守護神で、多面的な性悪をもつ。

エジプトのトート神とギリシャ神話のヘルメスが合体してヘルメス・トリスメギストスになったとされ、伝説的なエジプトの賢者である。

12世紀ころから錬金術と結びつけられ、ヘルメスは錬金術師の守護者で、学問や技芸の祖である、となった。

ヘルメス主義は、ヘレニズム文化の代表で、B.C.3世紀ころからエジプトのアレクサンドリアを中心に発生した宗教である。『ヘルメス文書』はアレクサンドリアを中心としたエジプトの神官・学者が作り出したものであり、宗教的著作である。

コジモ・デイ・メディチが、プラトンよりもこちらに興味をもったのは、この書が錬金術の書だと聞いたので、早く読みたかったわけであろうか。ちなみにコジモは収書家であり、大枚を払って書を手に入れるという噂がヨーロッパ中で広まっていたので、東ローマの人は彼に速く売りつけたのであろう。

ヘルメス文書は、ヘレニズム時代にエジプトを中心に流布された文書群で、11世紀ころまでに東ローマ帝国で17冊の文書に編集された「ヘルメス選集」が中心で、中世ヨーロッパでは知られていなかった。これ以外で、ヘルメスの著作とされる「アスクレピオス」があり、早くからラテン語化され、知られていた。20世紀にナグ・ハマディ写本が発券され、そこにヘルメス文書の一部がある。

柴田有は、ヘルメス文書を4つに大別した。1、哲学・宗教的な作品。2、占星術の作品。3、錬金術の作品。4、魔術の作品<sup>(25)</sup>と。

ヘルメス主義は、親宇宙的であり、キリスト教と矛盾しない。グノーシス

主義は反宇宙的であり、創造主の否定につながる。

「ヘルメス選集」は、コジモ・ディ・メディチが1460年に入手した。

錬金術の原典としてのヘルメス文書から訳出されたのが「アスクレピオス」や「ポイマンドレース」で、当時の人々によって争って読まれた。ちなみにアスクレピオスはギリシャ神話に登場する名医である。ポイマンドレースはヘルメスである。

エジプトの知恵の神トートとヘルメスが同一視された。ヘルメス・トリスメギストスという賢者または神が、アスラムヒロウス、タト、という弟子に知恵を伝授する。

ヘルメス文書のうち、主要な1つは「ヘルメス選集」である。『ヘルメス選集』の内容は、

- 1 ヘルメス・トリスメギストス（=ポイマンドレース）と求道者との対話で、内容は、1、幻、ポイマンドレスの出現、2、啓示、3、宣教、4、頌栄。
- 2 トリスメギストスとアスクレーピオス（ここでは弟子）との対話。
  - 1、場所、2、神。
- 3 ヘルメスの教え。宇宙の形成。宇宙の解消・更新。
- 4 ヘルメスとタト（ここでは弟子）との対話。
  - 1、神・世界・人間にかんする通話、2、著者の見解、叡智、世界。
  - 3、神 すなわち「一なるもの」。
- 5 ヘルメスから子タトへ。
  - 1、不明なる神がもっとも鮮明なこと。2、神の認識と「叡智の眼」、
  - 3、神の表象、4、神の内在と超越、5、賛美、神人合一の体験。
- 6 アスクレーピオスに対する導師の独白。

善は神のうちにのみあり、ほかにはどこにもないこと。

  - 1、善、2、美と善について。その認識。
- 7 導師の独白。神に対する無知が人間で最大の悪であること。
  - 1、人間の現状としての無知。2、人間の目標としての知識、3、無

知からの脱出。

- 8 導師と求道者との対話。存在するものは何一つ消滅しないのに、迷妄の輩は変化を消滅とか死と呼んでいること。
  - 1, 死は実在しない, 2, 論証。
- 9 導師とアスクレーピオスとの対話。
  - 1, 人間における知性と感性。2, 世界における感性と知性, 3, 神における感性と知性, 4, 結論。
- 10 ヘルメストリスメギストスとタトとの対話。
  - 1, 3つの存在, 2, 叡智論。
- 11 ヌースからヘルメストリスメギストスへ。
  - 1, 万有と神, 2, ヌースの教え, 3, 結論。
- 12 ヘルメストリスメギストスからタトへ, 普遍的叡智について。
  - 1, 叡智論。2, 神の認識。
- 13 ヘルメストリスメギストスが山上で子タトに語った秘められた教え, 再生と沈黙の誓いについて。
  - 1, 再生前の教え, 2, 再生, 3, 再生後の教え, 4, 頌栄, 5, 奥義に関する沈黙の誓い。
- 14 ヘルメストリスメギストスからアスクレーピオスへあてた書簡。
  - 1, 序, 2, 創造者と被造物の関係, 3, 一切は「二つ」に尽きること。
- 15 欠
- 16 アンモーン王にあてたアスクレーピオスの解義, ——神, 質量, 運命, 太陽, 叡智の本質, 神の本質, 人間, 統一的構成, 7つの星座, 像にかたどられた人間。
- 17 タトと王との対話。

非体は体において見られる。
- 18 雄弁家の演説。身体を受動の下に阻害されている魂。
  - 1, 導入, 2, 本題。

コジモ・ディ・メディチは、本書を入手して、ラテン語化させて、読んでみて、満足したのだろうか。『ヘルメス選集』は、柴田が分類するうちの1、哲学・宗教的な作品にすぎないからである。『ヘルメス選集』がきっかけになったとは思えないが、ルネサンスの時代に、占星術、錬金術、魔術の研究が進んだ。

## まとめ

12世紀ルネサンスはルネサンスの前史になったかもしれないが、ルネサンスそのものではない。東西キリスト教の合同の公会議がフィレンツェのサンタマリア・ノヴェッラで開かれ、ここから、瓢箪から駒のようにして、ルネサンスの諸潮流の幾つかが生まれた。ルネサンスの初めの人的プロモーターは、美術と建築の点ではコジモ・ディ・メディチであった。

## 注

- (1) モンタネリ、ジェルヴァーゾ『ルネサンスの歴史』上・下 中公文庫、昭和60年。
- (2) アルノルフォ・ディ・カンビオ (c.1245-1302またはc.1310) は、フィレンツェの彫刻家、サンタ・マリア・デル・フィオーレやサンタ・クローチェ聖堂を設計した。1280年ころまでフィレンツェ随一の工匠だった。
- (3) 英語、ドイツ語の表現。天文学・幾何学の書。
- (4) ガレノス (c.129-c.200)。ペルガモン生まれ、ギリシャの医学者、古代医学の集大成をした。解剖し、皇帝医にもなった。ヒポクラテスの医学を伝えた。生きた動物、豚、猿、山羊、犬を使って解剖し、臨床実験をした。瀉血を主張した。医書をギリシャ語で書いた。これは東ローマ帝国に伝わり、盛んになる。その後、ササン朝ペルシャへ広まった。それがラテン語になった。16世紀まで西洋医学を支配した。打破したのがヴェサリウスである。
- (5) 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫。  
ハスキンス『十二世紀ルネサンス』みすず書房。
- (6) ネストリウス派の存在と意義は大きかった。ネストリウスは、キリストは人でもあるとする。キリストは神だとするアタナシウスとその派と対立する。だがアタナシウス派が勝利して、カトリックの教義となる。中世を作ったゲルマン諸民族は初めネストリウス派が多かった。その後、改宗するのである。

- (7) 伊藤俊太郎「12世紀ルネッサンス」講談社。
- (8) フリートリヒ2世。神聖ローマ帝国皇帝。1194-1250。ホーエンシュタウフェン家の皇帝。第15代。在位 1220-1250。シチリア王を兼ねる。
- (9) ちなみに煉獄は、カトリックの考えで、死と天国との間にあり、多くの人がとががいる。天国にも地獄にも行けなかった人々がいる。しかし苦罰によって罪を清められ、天国に行ける。
- (10) ヴェルギリウス Publius Vergilius Maro, BC. 70-19。北イタリア、マントア（今のマントーヴァ）、アンデース生まれ、ローマ市民の子。クレモナ、ミラノ、ローマへ BC. 53-52に移り、教育を受ける。コルネリウス・ガルスと友になる。主にネアーポリスに住む。生涯めとらず、プリディシウムで死。作 BC. 37「詩選」、39「農耕詩」、「アエネーイス」。
- (11) バーバラ・ルイス『ダンテ』岩波書店。ボッカチオの伝記あり。ブルーニのダンテ伝。ホームズ『ダンテ』教文社。
- (12) クリステラー『イタリア・ルネッサンスの哲学者』みすず書房 1993年。邦訳書は、岩波文庫で四作ある。「カンツォニエーレ」は、名古屋大学出版である。日本の研究者は近藤恒一。
- (13) 研究者オヴェットは パリ生誕説、ピッラーノヴィチの研究はこれを打ち破き、チェルタルドとした。ブランカは、フィレンツェ説を出す。
- (14) フィリッポ・ヴィルラーニの伝記「文豪の世界 5 ボッカチオ」タイムライフ ブックス 昭和45年版。  
オヴェット『評伝 ボッカチオ』新評論。  
オペレッタ「ボッカチオ」スッパ作曲。(永竹由幸『オペレッタ名曲百科』音楽之友社、に解説あり)
- (15) 岩波文庫、1981年。先に、『フィレンツェの人々』日本評論社、世界古典文庫、3冊。
- (16) 翻訳、論創社、2017年、これはラテン語で書かれた。
- (17) ジョン・ウィクリフ (c.1320-1384)。イングランドの初期宗教改革者。
- (18) ヨハネス・フス (c.1367-1415)。チェコの初期宗教改革者。ウィクリフの影響を受ける。チェコの国民的英雄。
- (19) マルティヌス5世教皇 在位 1417-1431、西欧キリスト教内での教会大分裂の解消後に教皇に選出された。ローマの名門コロンナ家の出。  
メデイチ家は教皇ヨハネス23世を支援した。ローマ教皇庁の財務管理者だった。そこでマルティヌス5世教皇もメデイチ家を信任した。1424年彼はメデイチ家当主ジョヴァンニ・ディ・ピッチに伯爵位を与えようとした。だが断られた。西欧キリスト教内の教会大分裂が終わったが、英仏百年戦争、フス戦争、新公会議の3つの問題があった。フス問題について言えば、ボヘミア王ヴェンツェルがフス派を庇護していた。そこで1418年から教皇はヴェンツェルに圧力をかけ、フス派弾圧を始めた。1419年にヴェンツェルがなくなり、反フスの弟ジギスムンドが継承し、それを認めないフス派が蜂起した。最後に、公会議の招集はうまくゆかず、結局、バーゼルでの開催が決まった。
- (20) エウゲニウス4世 (1431-1447) は、バーゼル公会議の時期のローマ教皇で、ヴェネチア出身である。伯父教皇のひき立てで出世した。コンスタンツ公会議に出席した。マルティヌス5世の後任である。穏健フス派を1438年に承認し、問題が解決した。東ローマ皇帝ヨハネス8世パレオロガスが対オスマン帝国へ

の十字軍を呼びかけて貰おうと、ヨーロッパを訪問し、合同会議の機運が生まれ、1438年にエウゲニウスはフェラーラに会議の場を移した。コジモによりフィレンツェに移され、合同の公会議が行われ、東西教会の合同、教皇首位説が話された。1445年に閉会した。エウゲニウス4世は、コジモがスフォルツァ家と結んだ事で激怒した。

- (21) フス派。フスの影響下のひとつと、主にチェコとポーランドに勢力を拡大した。フスの火刑にあって1415年に亡くなった後、カトリックの圧力に会い、戦争になる。
- (22) オスマン帝国。イスラーム教の帝国、オスマンを祖とし、強大な帝国を作り、20世紀まで続く。
- (23) アルド・タルティーニ監修『サンタ・マリア・ノヴェッラ』Firenze, n d.
- (24) ウィンスピア, p.7.
- (25) 『ヘルメス文書』朝日出版社 1995年版。

## フィレンツェ文献一部

- ウィンスピア『フィレンツェ』Firenze n d.  
 宮下孝晴『フィレンツェ美術散歩』新潮社。  
 メアリ・マッカーシー『フィレンツェの石』。  
 佐藤幸三『図説 ボッティチェリの都フィレンツェ』新潮社 1998年。  
 塩野七生『銀色のフィレンツェ』朝日文庫。  
 森田義之『フィレンツェ・ルネッサンス 55の至宝』新潮社。  
 ブラッカー『ルネッサンス都市フィレンツェ』岩波書店 2011年。  
 若桑みどり『フィレンツェ』文春文庫 1994年。  
 若桑みどり『フィレンツェ』講談社学術文庫 2012年。  
 中島浩郎『図説 フィレンツェ』新潮社。  
 パオルッチ、スカリーニ『フィレンツェ大図鑑』西村書店。  
 マキアヴェリ『フィレンツェ史』上下、岩波文庫 2012年、ちくま学芸文庫。  
 高階秀爾『フィレンツェ』中公新書 1966年。  
 近藤剛夫『フィレンツェ 美を求める旅』。  
 ヘレンガ『フィレンツェ幻書行』扶桑社。  
 『宮下孝晴とゆく隠れた珠玉の作品に出会う旅 フィレンツェ・トスカーナ編』。  
 森田義之『フィレンツェ・ルネッサンス 三巨匠 レオナルド・ダ・ヴィンチ ミケランジェロ ラファエロ』。  
 ギッチャルディーニ『フィレンツェ名門貴族の処世術』講談社 1998年。  
 ギッチャルディーニ『イタリア史』。  
 朽見行雄『フィレンツェの職人たち』。  
 ララチッタ『ローマ フィレンツェ』。  
 金沢百枝『イタリア古寺巡礼』新潮社 2011年。  
 バレストラッチ『フィレンツェの傭兵隊長ジョン・ホーンウッド』白水社 2006年。  
 池上俊一『フィレンツェ』岩波新書 2018年。  
 古沢千恵『とっておきのフィレンツェ・トスカーナ』筑摩書房 2015年。

『フィレンツェ・ルネッサンス』全6巻, 日本放送協会。  
 クリストファー・ヒバート『フィレンツェ』上, 原書房 1999年。  
 R.W.B.ルイス『フィレンツェに抱かれて』中央公論 1999年。  
 ゲイッチャルディーニ『フィレンツェの盛期』。  
 ゲイッチャルディーニ『フィレンツェ』。  
 ゲイッチャルディーニ『フィレンツェ史』太陽出版 2006年。  
 『フィレンツェ』Roma Florence n.d.

## メディチ

森田義之『メディチ家』講談社現代新書 1999年。  
 マッシモ・ウインスピーア『メディチ家』Firenze 2000年。  
 雨宮紀子『メディチ家』世界文化社 2011年。  
 中田耕治『メディチ家の人びと』講談社文庫 1987年。  
 松本典昭『メディチ宮廷のプロパガンダ美術』ミネルヴァ書房 2015年。  
 金原瑞人『メディチ家の紋章』上下。  
 ヒバート『メディチ家』リブレポート 1984年。  
 ヒバート『メディチ家の盛衰』東洋書林 上下, 2000年。  
 中島浩郎『図説 メディチ家』新潮社。  
 ベック『メディチ家の世紀』白水社。  
 『メディチ家の至宝』東京都庭園美術館 2016年。  
 西藤洋『神からの借財人 コジモ・ディ・メディチ』法政大学出版。  
 シモネッタ『ロレンツォ・ディ・メディチ暗殺』早川書房。

## フィチーノの作品

フィチーノ『「ピレポス」注解。人間の最高善について』国文社 1990年。  
 フィチーノ『恋の形而上学』国文社 1985年。

## フィチーノの研究書

シャステル『ルネッサンス精神の深層』ちくま学芸文庫。  
 ウォーカー『イタリア・ルネッサンスの靈魂論』三元社。  
 クリステラー『イタリア・ルネッサンスの哲学者』みすず書房 1993年。  
 研究論文, 「プラトン神学への誘い」(『明治学院大学 キリスト教研究所紀要』  
 31)。  
 「マルシリオ・フィチーノにおける愛の問題」(北海道大学『哲学』17)。



## ルネッサンス文献

- ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス画人伝』白水社 1982年。  
ジョルジョ・ヴァザーリ『続 ルネサンス画人伝』白水社 1995年。  
ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』白水社 2008年。  
ブルクハルト『イタリア・ルネッサンスの文化』中央公論。  
ハウイジンハ『中世の秋』中央公論社 昭和50年。  
羽仁五郎『ミケルアンジェロ』岩波新書。  
ウォーカー『ルネサンスの魔術思想』ちくま学芸文庫。  
澤井繁夫『ユートピアの憂鬱』海鳴社。  
澤井繁夫『ルネサンスの知と魔術』山川出版。  
澤井繁夫『ルネサンス文化と科学』山川出版 1996年。  
澤井繁夫『魔術と錬金術』ちくま学芸文庫。  
澤井繁夫『イタリア・ルネッサンス』講談社 2001年。  
大塚金之助『解放思想史の人々』岩波書店 1945年。  
モーリー『魔術と占星術』白水社。  
『ルネサンスの神秘思想』講談社学術文庫。  
デッラ・ポルタ『自然魔術』青土社 1990年。  
野田又夫『ルネサンスの思想家たち』岩波新書 1972年。  
清水広一郎『ルネサンスの偉大と頹廢』岩波新書。  
西本晃一『ルネッサンス史』東大出版 2015年。  
平川裕弘『中世の四季——ダンテとその周辺』。  
ロス・キング『天才建築家ブルネレスキ』東京書籍 2002年。  
高橋友子『捨児たちのルネッサンス』名古屋大学出版 2001年。  
清水広一郎『中世イタリアの商人の世界』平凡社新書 1982年。  
イリス・オリーゴ『プラートの商人』 1997年。  
『ラントウィッチの日記』。  
シャステル『ローマ劫掠』筑摩書房。  
エレナ・カプレッティ『イタリア巨匠美術館』西村書店 2011年。  
藤沢道郎『物語 イタリアの歴史』中公新書 2005年。  
藤沢道郎『物語 イタリアの歴史 II』中公新書 2004年。  
『イタリア史』山川出版 2011年。  
モンタネリ、ジェルヴァーリ『ルネサンスの歴史』上下 中央公論 1985年。  
マルテロ・シモネッタ『ロレンツォ・デイ・メデイチの暗殺』。  
アイザックソン『レオナルド・ダ・ヴィンチ』上下 文芸春秋 2019年。  
アータレイ、ら『ダヴィンチ全記録』日経ナショナルジオグラフィック 2013年。  
塩野七生『ルネッサンスとは何であったのか』新潮社。  
バルバラ・ダイムリング『ボッティチェリ』Köln 2005年。  
ブレデカンブラ『ボッティチェリ〈プリマヴェーラ〉』。  
D・P・ウォーカー『ルネサンスの魔術思想』平凡社 1993年。  
チェッリーニ『チェッリーニ自伝』岩波文庫 1993年。  
プロカッチ『イタリア人民の歴史』1, 2, 未来社 1984年。  
小説 辻邦夫『春の戴冠』4冊, 中公文庫。